

して若菜の巻に学ぶことよってさけることができるということになるわけである。よく世間では「榮花物語」は歴史を文学的に書くために「源氏物語」などに学ぶのだという説が行なわれているが、それだけではないのではないかと思う。作者にとって都合の悪いところにぶつかると「源氏物語」の或る場面をもってきてそれに似せて書く。そういう事実が作者には見出されるのである。

以上でこの稿の主旨は終るのであるが、一・二関連したことを附言すると、「源氏物語」を読む場合、古来「河海抄」のように物語でありながらその一々の出来事に現実の人間や事件をモデルに見たて、そういう事実関係を詮索することが行なわれている。そういうことも無駄ではない。或る場合にはまさにその通り、或る人物なり事件なりがモデルになっていたかもしれない。しかしながらそうした詮索だけではなくて、もっとひろくは紫式部がその目で見ておった現実社会のもろもろの、いわば歴史的事件にならないようなことのなかから、人間関係を洞察して、そういうものが「源氏物語」の基礎になって書かれているだろうと、こういうふうに見る方がより一層有効であろう。帝王が目をわろくされるというのとは異常な事件である。だから紫式部が朱雀院に眼病をわずらわせたのは三条天皇の眼病の事実をふまえているにちがいないと見ることもあるいは悪くはあるまい。けれども平安時代に眼病をわずらった人はしらべてみると意想外に多いのである。そういう事実があるならば天皇に眼病をわずらわせてもそう突飛なことではない。一体平安時代には糖尿病をわずらった人が非常に

多い。藤原道隆しかり、その子の伊周しかり。その弟の隆家が目をわずらったというのは、糖尿病から来る白内障であろう。つまり糖尿病の人は白内障をわずらう率が非常に高い。これは現代でもそうである。そうなる、そういう一般的に見られる所の人間の洞察の仕方がいかに式部は高かったかということを改めて感ずるのであるが、そういうふうモデル関係をみて行く方が良いのではなからうかと思う。因みに、三条天皇の眼病については諸説があるが、年齢、病状等から考えて緑内障というのが最も当るよう思う。

(文責在記者)

### 修験道における宗教的実践

本学教授  
文学博士

五 来 重

修験道における宗教的実践という題で述べる動機は、最近『修験道儀礼の研究』(宮家準氏—慶応大学)という大著が出ました。しかし宗教に於ける儀礼と実践とはどういう関係をもつものかというところを、修験道にことよせて考察してみるのが本講演の目的であります。

宗教の基本的な本質は信仰的实践にあり、実践はやがて儀礼化するともに、一方では教理化していくものである。ところが修験道という日本独自の宗教は、実践そのものを生命とする宗教であって、もしこれが儀礼化、或は教理化した場合においてはむしろ

るこの生命はなくなるといつていいような宗教である。ところで私は修験道の歴史をだいたい三つに区分して、奈良時代前期から平安時代初期までを原初修験道と呼ぶ。次に平安時代中頃から室町時代頃までの実践と理論を伴う時期を盛期修験道と呼び、これが儀礼化して、実践をおこたるようになった晩期修験道と呼ぶ江戸時代以後の修験道を比較しながら、修験道の実践とはどういうものかを述べてゆきたい。

中世末期から江戸初期になると十界修行という一つの儀礼が出てくることは、「峯中十種修行作法」「三峯相承法則密記」等に書かれているのでわかる。一応こうした修験道書によると、十界というのはいわゆる六凡修行を中心とする十界にあてはめて修験道の峯中実践を儀礼化したものである。つまりそれをまとめると

- 1 床堅——即身即仏（不眠不動行）
- 2 懺悔——人道修行（五体投地礼拜）（額突き）
- 3 業秤——地獄道修行（なんばんいぶし）（不動石）（覗きの行）
- 4 水断——畜生道修行
- 5 闍伽——（謂、禪、闍伽）以父母仮和合依身一水令帰阿字本分大地）
- 6 相撲——修羅道修行
- 7 延年——天道修行（妓樂歌舞）
- 8 小木——（新客等依身断焼之義也、示一切衆生死滅所帰、焼小木以有漏依身令帰本有大地之義相也、是則尽三生死二法之義也、故法義小木者場柴灯焼之、場柴灯者新客等逆修

#### 葬礼作法也）

#### 9 殺断——餓鬼道修行

10 正灌頂——（六大法身慧命相統法乘、無相三密依正一體極位也）

ということになるが、床堅・闍伽・小木・正灌頂は必ずしもこの十界のうち四界にあてられないので、こういうところに山伏の實踐と儀礼との間に違いができたということがわかる。

ではこれらの実践の内容とはどういうものであったかということをかながえて見よう。地獄道の修行は業秤<sup>ごうじやう</sup>ということであるが、これは現在では羽黒修験の峯中修行の「なんばんいぶし」又は大峯修験の「覗きの行」というものがこれにあたるものと私がかながえている。もともとはおそらく、その人のおかした罪業を計って、業が重ければ谷に落とすという命がけの実践であったらうと思われる。普通、宗教というと、激しい命がけの修行よりは、観想による理論的な教理と考えられがちだが、しかし日本では既に僧尼令の頃に命をかけた修行の実践形体があつた。つまり大宝律令の時代に、日本の民族宗教として焚身捨身<sup>たきみすてみ</sup>がおこなわれていたことが、僧尼令、第七条でわかる。実際にそういう焚身（焼身自殺）捨身（投身自殺）がおこなわれておつたということは、史料的にもかなりみられるのである。

『日本靈異記』（下・1）によると、法華經を持していた禪師（山伏）が熊野山中で投身自殺したが、舌だけが腐らず読經を止めなかつたということで、法華經を持していたことをその功德のしるしとしておる。即ちこれは古代において法華經の滅罪性とい

うことが考えられるので、この法華經を行ずるところの持経者は一方では滅罪のために捨身もすることが話の背景としてあった。

現在では大峯修験に「覗きの行」というのがあるが、その根源は実際は罪を滅するために断崖から捨身するというのだが、それが儀礼化すると綱で断崖に吊り下げてから、引きあげてもどしどもらうということになる。これはまた業秤という儀礼ともなる。罪の計り方としては「峯中十種修行作法」等によると、室内でやる場合は不動石という石を天びん棒のようなものの一方につけ、一方には体をしばってぶらさげたということであり、罪業が重ければ山伏の体がかかるから、これを幽谷に落すということを誌してある。つまりこれも捨身をこういう儀礼化したものであった。

もう一つの儀礼として現在でも羽黒修験でおこなっている「なんばんいぶし」であるが、これももとは山伏の体を法螺の綱（螺緒）でしばり天井からぶらさげて、下から護摩の煙でいぶしたのだったろうと思われる。即ち湯殿山の即身仏については、死体を本堂の天井から下げて二十一日間護摩の煙でいぶすことによつて、即身仏（ミイラ）をつくったことが言われている。そうすると業秤の行を、即身仏をつくるという手続に残しておいたということになる。このようにして個人または共同体全体の罪をつぐなう為に、一人の宗教者の生命をうばうということが、修験道の一歩原始的な実践だったと思われる。尚、その他に『本朝法華験記』（上・第九）の沙門応照の火定（焼身自殺）の話、同書（上・第十五）の薩摩国一沙門の焼身、或は同書（中・第四十一）の指燈の話であるが、罪を犯した肉体の一部を焼く苦行をしている。ま

た同書（中・第四十七）の攀取上人は同様に焼身し、法華經を誦しながら往生をしたという話である。『元享釈書』（卷十二）の戸隠の積長も焼身したという話で、焚身捨身が決して物語だけでなく実践していたものだ、我々は確信できるのである。

その事例として天正五年（一五七七年）博多において、火定と入水往生をとげたという山伏を、耶蘇会宣教師がローマに報告したという文献がある。このあたりが修験道実践としての焚身捨身の一番最後の例だろうと思われる。その中で宣教師は「暗国の子等（山伏）が虚偽の救のために、光明の子等（クリスチャン）が真の救のためなすよりも、多くのことをなすことを、知らしめんがためなり」と感動して、山伏の死の実践というものをローマ法王庁に通信しているのである。このような点からみて我国には修験道という民俗的宗教の中において、本当に自分の命を捨てる実践があったことを知るのである。

では修験道の精神、或は原理というものは何であるかというと、それは苦行主義であり禁欲主義であり、また滅罪主義であるといえる。苦行主義の一つは山にのぼりその苦行に耐え、ある共同体のメンバーになる資格をえるという通過儀礼としての苦行である。次に全ての人、ある特定の集団、或は個人の災害とか病氣というものを払う為に、その人々に代つて苦行するという代受苦としての苦行である。つまりそれらの為の苦行が修験道の一つの源になっている訳である。苦行の形としてはいろいろであるが、まず生命を捨ててしまうということ、次に山に登ることによって非常に肉体的苦勞をなめるということ、或は労働をするということ

である。労働をするという一つの形が、山中抖擻のとき必要な水を汲んだり、薪を採ったりするということで、いわゆる十界修行の關伽及び小木の行が出来た。この關伽と小木は山伏集団が山のぼつたときの、ある期間の生活を考えてみると、谷底に下りて水を汲んだり、炊事や護摩に必要な薪を採ったりする労働を減罪の苦行として課するということが最初であった。これが儀礼化すると十界修行におけるところの、籠り堂の側の關伽井から水を汲み、形ばかりの小さな木を切り護摩木として使用するというところにすぎなくなる。ところがこれがさらに教理化されてくると、前述の修驗道書にあるように、關伽はすでに汲んできてある桶から杓ですくってこれを先達にささげるといふ儀式になる。そうすると、先達はその關伽を行者の前にこぼすのである。こぼすことによって、お前の生命は実は父母に生んでもらった体だけれども、これがもとの大地にかえったのだという教理を示す。修驗道における行が命を捨て、一度死ぬという擬死再生にかかわっているからである。また小木の行はその小木の護摩で自分の体を焼き捨ててしまうという解釈になる。

そうした結果として、十界修行は第一番目の床堅と、第十番目の正灌頂に示されるごとく、即身成仏或は即身即仏になるという教理が成立し、これを「三密依正一体極位也」といって、大目そのものになるといふことを実は理論づけているのである。しかも実際の入峰の作法として、入峰の直前に行者の生命を断つたことにする「断末魔」の作法として「ボンテン倒し」をやる。また案中修行において死の一步手前までの苦行を行うといふことは、死後

に果さねばならぬ地獄での苦行を、あらかじめ修驗道の実践において果しておこうとする、逆修儀礼として意味があるのである。そして正灌頂において母の胎内を表わすという密室の儀礼がおこなわれ、そこで生れかわるのであるが、山をくだって出るときに出生で(山に入ることを入成いりなりという)の作法といって、ウブ声あげるといふことを現在でも行っている。従って修驗道の実践というものが、一度とにかく死んで死後のあらゆる苦しみを受け、やがて清らかな体になったときに、その母の胎内にやどって生れかわるところの擬死再生の儀礼であって、これを修驗道実践の中心としていたことがわかる。

よって修驗道のもっている苦行主義・減罪主義・禁欲主義というものは、そうした死後の地獄の苦しみをあらかじめ果すことにおいて実は意味があった。この禁欲主義とは十界修行の中の穀断(五穀断・十穀断)、或は床堅の不眠不動行もそのあらわれである。禁欲主義が食物の禁欲だけでなく、『空也誅』の中で空也が土佐と阿波の海中の湯島での苦行などにあらわれているように、人間の動こうとする欲望、眠ろうとする欲望もどめるといふこともやっていたことがわかる。

苦行のもう一つの形として懺悔があり、これは人間道の苦行だとされる。これは五体投地(僧侶となる為の加行の礼拝行や東大寺お水取の行)、或は額突き(「枕草子」)、「源氏物語」などの御嶽精進の行である。修驗道ではそうすることによって、人に代つて罪を滅すという懺悔をする訳である。また西の覗き(大峯山上ヶ嶽)で、谷に体を懸垂させられた後、「ありがたや西の覗きに

懺悔して弥陀の浄土に入るぞうれしき」という秘歌をうたう。おそらくもとは行場ごとに秘歌があつて（現在は十三首しか残っていない）、こういう苦行をした度に、秘歌により今の行の意味を山伏に教えていたとおもわれる。だとすればこの秘歌の意味するところは、西の覗きの懺悔は唯この懸垂だけでなく弥陀の浄土にしていることなのであつて、そのまま飛びおひて浄土にはいることを意味しているのであつた。従つて最初にのべたように捨身することによつて浄土に生れかわる、死ぬことによつて生れかわるといふ信仰内容をこの行によつて表現し、又その歌によつて解釈しているのである。

先述したように關伽と小木の行については、これが法華経の実践に他ならなかつた。ということでは平安時代の頃には法華八講というときとなえる歌が現在ののこつている訳だが、これは法華八講の第五巻の中日に薪の行道をするときにうたつた。この薪の行道は薪というのがちょうど小木にあたるので、おそらく修験道の苦行がはいつてきたと思われる。ところでその薪の行道を行うとき唱える歌が、「法華経をわが得しことは薪こり、菜つみ水くみ仕えてぞ得し」とあり、これも形ばかりの苦行行道ということであり、一つの苦行の儀礼化であつた。或は『梁塵秘抄』（一一二）に「氷を敲きて水掬び、霜を排ひて薪採り、千歳の春秋を過ぐしてぞ、一乗妙法聞きそめし」というごとく、小木と關伽の行は、法華経を理解し体得する為には必ずしなければならぬとされてゐる。平安時代までの修験道というのは、必ずしも密教だと結ばれてゐるのではなくて、法華経の実践、いわゆる法華経の滅罪

というものと修験道の苦行と結合して、このような法華経的修験道の苦行が行われていたということがいえると思われる。

修験道の実践というものは、現在ではどうも考えられないし、我々はそれ程生命を軽くしたはずはないと考えがちだが、我々は日本人の古い信仰の中に、自分の犯せる罪や無始以来の罪業は、命をもつてつぐなうのだという一つの宗教があつたと考えてよい。即ち、命をもつてしなければつぐなえないような、非常に強い罪業意識があり、しかもそれは単なる観念化された罪でなく、現実の災いというものをそうしたつぐなうによつて、初めて排うことができるのだという信仰があつて、これを修験道が受継いで命がけの実践を行つたのであろう。しかし修験道が高度な理論、或は大きな教団をもつようになると、そうした肉体的な実践、肉体的な苦痛をもつてあがなう、生命をもつてあがなう、という滅罪はだんだんと消え、そして理論と儀礼だけになつた。その時は修験道というのは、実はもう終末期にはいつていふことを修験道の歴史のなかにみることができるのである。従つて、こういう実践が儀礼化されると同時に理論化されるという方式は、ひと修験道ばかりでなく全ての宗教に言えることではなからうかと思われる。「我昔所造諸悪業、皆由無始貪瞋癡、從身語意之所生一切我今皆懺悔」という仏教徒が日々唱える懺悔文は、いま空洞化された罪業感でしかない。これを修験道は宗教の原点として肉体をもつて懺悔を實踐したという点に、現代の宗教への反省をもとめてゐるように思われる。